栄花物語 四十 滝

WA 7
148
20 上

第六拾九號

国立国会図書館　タイトル『栄花物語 40巻』 請求記号 WA7-148

ガラス使用

栄花物語

廿九　おのの貴瀧
四十　むらさき野

国立国会図書館　タイトル『栄花物語 40巻』 請求記号 WA7-148
ガラス使用

東京都立中央図書館蔵

布施をきたうし
寛治五年おもくなりやまひつよくなりぬと
聞きてまゐりたるをつゐに小二月二日うせ
ぬ世の人なげかせたまふ
世の人さまざまおろかなりしを太政大臣恩
寵の程
ものの上一言なともいふあるを八十
餘年世の一の人にておはしつるはかな
かりしかはいくさのこと
世をいとはせたまふ
すなはちさはりなくうせ給ひぬとかや

国立国会図書館　タイトル『栄花物語 40巻』　請求記号 WA7-148
ガラス使用

ゆきしくにと申す世法おぼつかなく成ぬ
玉かるへ花さかぬよをゆかしがりてをしへくきゆんをき
てさひ〜花ありと聞けるをふらせ世法ゆん
ゆえ花ゆく山ひしをとをうり百万遍をとて
させとふらせ竹つをいくるる世みはりへ
かんごとのひ中ゑまれかゆみ一遍及
れ六十余年ゆえさせ竹てかくき世法し
ゆきいく人の思ひやしられをあり八十
三ゆえ世給ひてさいを刀をとをけ
ゐをおりまさてをゆ月かよ宇ちの法堂よりて
ゆきてはんのかさりあふ条人ををおりめり

ゆきてと申す世法人ををうり見法世竹
つきゆきのひ人元おりかるををりなり何
のくなるぬ下部年ころつゆりるを方
ともかきまひうさ海ことりうりいる
ゐを法ゆかよ年ゆくふをの法人年ゆく
と世の年ゆきまりてかくゆ今はゆちを
うをまりさふるもおりまなく
をりをまゆ法四十九日の事ゆをいとめて
たくせる法ゆいまハゆをて京へりる世法ゆんゆ
うりを方日ゆりをくよゆゆみうゆきみうゆ
く学ゆりをうゆけゆ不法願ゆをとをの

なくとりつのはせ給たる扇たうゝ見まてあら
ちゝうゝ試ひ給まゝを作ゝ〻うゝ所らを
させ給てをうゝ宮のつゝおわ
わゝまゝくおわ〻めさ所傍はふらゝせ給ふ
はかゝゝみおわ〻めゝうゝかゝて世中のいろ
あゝゝ海りかとゝして母宮まゝ小一條院は或る
乃宮故侍従寧桐は皇太后宮はは女房ふむまゝ世給ひ
ゝるわ所世物は宇治大納言の所子のあ紀乃かゝ
宮母ゝゝもなゝゝひあてやゝなゝ人まて斎院を
四宮おわゝ世給ふ〻〻ゝ小一条院の所ゝひ
けゝ人をおわ〻めゝて殖殖女院とゝゝゝゝ

母中おわゝ倫中寺にあわ物ゝとゝゝ女宮ふ
ゝゝ物〻〻物けゝ二宮所物はぬゝとめてなきゝ
乃ゝおはかゝ世物ゝ伯たゝ世給へゝれと陽なる紀
ゝゝ試作ゝゝと和〻めゝゝ宮ゝ紀を院ゝ
物ゝゝまゝゝん世ゝ〻めを左大と乃ゝ女御
女母ゝゝゝゝまゝ六月八日ゝ所紀乃寛首
ゝゝ宮物月太饗ゝゝ人ゝくゝゝ人饗ゝゝゝを
ゝゝゝなゝいとめてたゝ十六日に太皇太后宮女
はゝゝゝ世給ぬゝゝゝを一ゝゝ院母からを
治ゝゝゝゝゝゝ太皇太后宮なゝ世給へゝ
ゝゝゝゝ中宮ゝゝは故院は治ゝを物ゝ南〻内

国立国会図書館　タイトル『栄花物語 40巻』 請求記号 WA7-148
ガラス使用

乃御まくらもとにまいりてつらぬた
皇太后宮ハ殿ハ御はらからにてをはしまし
けれとも人をのみなら世給ふくいうをかし
き人もあるかの君とはれはおやにねはまされ
らを給ふこうかれてめつらしう御まいり人中御つ
乃はおやなくてもうけたまはりたまへさせ給ひしそ
給ふ〳〵御給ひをはしくは給ふ御〳〵
同御車やまひをうかとの清女きはきまたちて
のうち小女帝にぬ給もなくやもはのあるまして
院なとはいとゝ御給ふ上達部もおはす
大女院ハ我御院分をゆつり申給さんと奏せ給ふ

給四條宮太皇太后宮と奏こえ給せつきくの乃
かゝ勝行事乃事也中宮大饗ハあるへき御乃
ちうめくあ毎たたかれよりあつをくさせ給へを
給のうぬるなくめてたし大饗乃日乃あるはまよ
師子こまいぬりくやうひ寺紀屋陣やはとの外
内りをいとめくさく拜礼かと思屋るあるまし
とあの多れはおやの中納言ハ一ぬん乃はは時よ加
良旅ハ北御子左殿乃清ごひと者ひよ大納言ハ成
給ふ紀はあるよ乃左殿乃簪をひ紀こはせ竹て弄院
の御ふ乃ハ御ふとうせ給きれをなる屋乃先帝
の中宮をは皇后殿れ皇太后宮と皇太后

宮中にあがる筵を大納言殿のうへとの
にみせくはつせられん東三条のおくさま
宮ちかうひてゆゝしくかけて侍ふれたまへりお
りゝすがたをいとよくかくしたくい
みゝめ房三日のかりさゝはくしたくいとなりきこえし
かりをかけわたしたまふかりさかりをかいて
めくらせたまへりのうちはとくいゝ殿ばらとも
をきこしめさせ宮にはせ給はつらひするひら
つすひまをなくひゝもいまをたゞおもを
なりとも迷ふ人くしのゝ法ゝとしかく
きこえたまふたなりけとそうちのゝうへを世人

も申ゝかの筵文大夫乃母君のゝ殿ばらつまり
ひきくゝせ給をを作りをさゝせ給りんは
興よそまりてとうれすまをうめなりて上臺
殿上人ばらうなくゝ記きそいゝ殿ばらねれをみ
こなどにのゝ和きゝゝ寺ばら泉院は式部命婦
をいひ人かもゝ源大納言殿乃はゝそいと
うゝゝうけの人乃小流ふさらひうゝ
うをおかゝかよ心をくなりいとよう量きの内
にきゝゝめゝてものひてめゝたるゝく
まうりの山さとよすをれをそれのようひ曉
よすりの海そすもれゝうなりすかりて

おもこと思ひこうを重ねられこつくすやうにあり
給すらん内裏ハうえて法皇ハ女院をも
ちうしうおもひてこそ思ひとりのくるはせ
給大納言殿も我もとあまりまいりまいらせ給
やうにこなたをのこ子ともいふなんなしの給
もすると同ゆるもきこえめやすらん大女院とは
上東門院とそおもこなとも申きこえはし
おもひきすところにまさうひく東の院とをかえ
さす宇治殿これをるう殿法ひけをおもひけ
かを法ひきおろうなくもはいちうちをんあや
きせ給ても女院わうこせ給ひ内裏ハ院をも二條院

やそ宇治殿ハるうこうよおもひきせハいと
おろきよ宮ひめすこうこいとをうおうせ
こせ給ても三四日はうちおもひきすを宮殿わる
らを給りんとりこせ給ひをはんおりこふは射
面のうをくおりめせとうひとあるにおけす
きせもせもらくはめる而ハおもうきすとあ
をくちおひをおりめ次十月十六日市禍とて
世中のそきみち市女市代るんかにとのく
大納言とも殿大納言と同ゆる殿ハ内の大面
おをきくすわあるとてまううを給ひをきこせ給
けうけうぬおもうよ拾乃文しこ殿ハこと

あにはうはゐそなへてなをこはりしめせと
宣旨いとうもうもう開白あはせ発させ給ふく
にまはりをかはりとおはをらるめりきてらちお
きうぞうしめせとのたまはせ給ふ御りうきおかれ
うちはねはいはせいあわらそ殿まあきのうちうう
英ありううしはつきうん乃唐衣ありそう幸花物の
うはんすくれうりうはちきくもはうなん
はつうひしとそ申はせ給へて女院二條開白
殿なとまる車あさつ三つ〳〵そうつせ給へ
しとあり〳〵と女院つれ小十月三日う條はせ竹殿
開白とのいとはのれふうりはれはと

かきせみ宣れうり物をを申はせてすくさん
すんかりまるを院はまりてやうんごうそ思
ちよ発はをあみさはくくはくうちまそられそ
きまつはめるあくりかりせ給二條宣留伝文かと心
はそくはうきふはりかはけうせ給はうまは開白
殿と清興乃ちまくなこうせ給そを申はさせ
竹へとはいさ車あうせもはくうはあを
の清うをつうはうてはのうんとくこをらせ
竹く清華遥の衣もあゆまはせ給御うはのきせ
をうはおくははよきそそ車あをそそまつり
はりあのあをもはすれるなはゆはりはりつう

わかゆのせいちん院も八十七にてうせにけれ
ばそのゝちはそもせいれいとなりにけれ
ばかりこれとりわけまさなりかのそのつゝ
いれさくまゝにせいりやくもめでたきところ
めでたくいみじうつゝ袴をきさせ給へる
人くも雲のうへにうせ給ぬるなをいとゝ
あいれなるまゝにかゝる人くなにはふ
ぬきかさりかゝりまはらんのちをめ屠れ
とれをとゝ乃人やてあやゝ家さまみそちうをば
いとこんうきことにはりあ乃西の院よりくなりあ
きもおぼせられぬをそうもゝをゆるつ記まゝを

なをとゝ乃をかをゆをりこの内堂の事は関白とのゝ
内子院の小弐乃四侍といりゝ人方をゝみこをゝ
れ傍正とゝをゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝとうせ給ふゝ
ハかりゝ苦乃法師とてなかゝ殿の内をゝ乃ゝ世給ふ
をもひをゝ乃法師子ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
こりゝ内ゝ乃ゝはせ給てゆゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
いてゝ法ゝ乃ゝ乃ゝれさせ竹女房をゝ乃ゝ乃ゝ
れかゝもおぼえすいとゝ月日のかをゝ乃ゝ
そゝくをとるのゝなくなりくをとかゝはあゝ
乃ゝ竹ゝ内ゝ所ゝ乃ゝるゝゝつけをゝ殿上人も
なくかゝりゝくゆく大盤をゝりつゝるゝゝ人

人ひとをふうらのわぬ浦くわをまみいみ記け
ふきからかなりけりそのりさふもりき
くーうにあれはるつきせを南とや
中文いまちりせの見ぬ見ーあらせ給
ゐうえ南くやーせ給とくはとくかりてそ
いくはせ給ける十二月ゆみ日ちうゐはけ
記はけませあはちはらひ人御殿の御加持
うはちをはちのあいよりはいを
ちをはちかうあはりせをくはゆはのたむな
とむひはるれこ家をを殆給ふうたえ
かさはなう御はし爰とはうをくやえれをいを

ちりおりはすを祖ーはいときらーうあうおーと
みをすたはうーきせ八雑の所ふはうちもいをん
かさはーかたあ所云ゐたはけはりきいくをはう
かりはのすちつけ爰をえさせ給はんの祖おりひ
ゐるへーさーぬふあくはつひきてたくは
殿の人すて四天人ををあーふつあちの自社御
ちをーひゆをの山よはうをんを心ちすうにあを
日花やうはいはそたくむやうふはっをやの法
ひうはうをひをこはけくよかくをは見くをを
かくをををおはゆ雪とまをとにいみーうあう
をあ人のはれうちふ思はけう承保二年正月二日

七月朔日にはうちなまめかしき女上人乃ことうるく
まいりまうでうちうちさそひ乃かさりこち
あくてとりまうでうちうちまいきハ宮すりきられ
ぬあるまとみしらうたうしきをはるあやせ
のやうも也今日ハ内乃御うしやうあやしまひまてまいり
うちうふうしたくいるゝ孫乃幸横おきへう
うきうて孫乃ものとはかりとあるうかゝ考うゝ顔に
おりうめくうて後一條院の御うしやうあるゝ笠式ゆ
ゝしひ一くあうう内ゝうまりゆゝひそこ明ひ
ゝ中ゝくゝ明まはなんとうて位ゝおりうまゝ
ふかゝ新御ゝうひゝおとこ乃ひまれうせ

給へる新ハ新うしまなりりうまいとめそたし
三日ハ八日にて多くうかゝ色うやゝて来三条
へわうゝ世給紅梅乃まひ式きあり内ゝもひも
とおうゝ世竹て乃幸あわ女房ゝ御うゝ交を
へうゝ匂ひ式資たり行幸のつきまいゝ殿給
うゝ紀あ宣さ海あの寺ひハ中ていまひとうて
ひかりうひくゝ乃ゝうくいうゝ世竹以内ゝうゝ殿
給くうやみうくゝまうゝ世給新ゝうゝあけあきは
ううかゝて御ゝ殿てのかゝ世給あ新なを
匂式ゆ見ゝ御ゝ御あわ内まかり乃ゝひ手遣とを
ゝうゝ殿かゝてもおうゝ御ゝなんまゝ殿ゝもも

国立国会図書館　タイトル『栄花物語 40巻』　請求記号 WA7-148
ガラス使用

[illegible]
[illegible]
[illegible]

殿もきこしめしなりてくなくなるぬるもののかをそなん
とせさせ給ふ殿御所の御方はかりをの義父おとゝ寺
とあるをとゝまりゝ勝竹ぬ三四日ときこえあれそうせ
ゆせ竹ぬきも尼大殿開白の宣旨ゝゝせたまひ
ぬもきこえいもんなとりそわるゝめくなき事の
ゝなりなゝ内大臣よゆつりをまゝまゝくおりゝ事
めと宇治開白殿乃譲ゝくゝゝゝゝゝ
ゆゝめせこいゝくゝゝゝゝゝ
なゝれゝゝゝ賞ゝゝゝ
殿ゝなんゆつゝゝ弱へゝ
おりにゝゝ殿乃ゝゝゝ

事とその後ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

せよ〳〵とまをさこそはまをれとなくせられきれ
もなきわらひをかせ給てそおはす一間ばかりの屋
大納言殿大うのなとをとをはらなけの縁給うへ
もいまはかよいつゝいかおりめしたんたる大あれ
はあわうあいをめてたうこそかはるらんのはつきこそ
あはれ元服せさせ給ひて中将とておはす一寺春日社
つうひよりこせ給ひ一宮治とのゝかはるまて使
せうをはかふへ道殿のんはうひとをよをせ給ふる
思いてゝまてあうをなりとのは皇太后宮に預国
かむをあはせつゝひかるをとおりけるにおはしこふ
あわうとう治ひかり少将とこそ今ひかるを仁和寺

はなをよてまうゝ給たをへりちかうう治こしを
いとおりくおこうます行ものほしにそあのやう
にむませうせたまへるを風むよをかはしまをあって
こうをこうちよはかりあるうの所ゝ乃中藤の
人ゝかりかは女院の中納言はれ君とゝ右大臣はれ子
に券宮寺基良とこそ〳〵人かむをあのをうをそ
あをまこりの給ひわも女院ひとを心ひかうこそ女
君とをいるをゝかはう治てうへよめかとお
ともをんうなきはうゝせ給てこそかうをせ給を
つをけゝうとうへよいれさせ治れとあれう
のちはせ乃ゝこれまうけられをこそいあるめ

この世をはなれてうおわりまつりてせ法
りうざまと女院う殿ゆを法わ申りかをいと拙し
給けんおとこ君をもとうとうとうとうひと人ゆせ
ものりかくく中宮りこれ者ひて女うやすて
おりてまをめつしに法ゆ殿ゆおりてまをいと
うれりとうりくうへをおりてめすおとこすて殿
つきたりてまをもめくくてみかくゆまくに
ておりてまをもめくくなんゆりけう心ゆ殿り
業りふそひとうほくりいりと出申ゆせ法
をりゆめれとうとうりの方納ゆりむすめ頼園りむ
もめりの服ゆれとりけう寧れの乳母とこゆみ四

際中納ゆれ女とくこのめれとうとうひと人ゆりゆ文
りのいとくおりをらまてひあうやれいとと
うせ給さまくふうりてうめてうれゆる頼也
りう宮ふこ殿りくれうゆれゆる法せをむゆそか
殿の殿ちゆひむまに人のくりうりうりとゆく
りせ給りの見車をとゆくくせてゆらんせゆを
法りりうれゆ殿ゆ殿ゆ殿ゆりゆ
ますりのりとゆゆりうさ殿くれかり賢業
りとゆりう世りゆ業卒りゆひりてを毎る頼ゆて
あわりんりう

閑白殿

ちしらんひをわすれ山ひめは
あつまてきうぬのひの秋のたき

皇后宮大夫敦房

あのいろ雲ちゆきとゆきとゆうの郭
なをさしらんぬのひの紀の寺紀

皇太后宮大夫祐家

めぢしく雲井はけるうみゆうれ
ようなりきあるぬのひの紀はたき

皇后宮権大夫経信

雲井よりちらきたつるたきのせも
雲ちちはたはたぬ明りけり

三位中将師通

これかとは花をうしゆきとちる雲の
雲ちよまかるぬのひの紀のたき

権中納言実

あちらんかいく雲のみをものつくあをも
乃ちをはしぬのひの秋乃ふ紀

中将公実

よとをもうこや山ひめは山ひ紀すぬ明
ちるをわれぬ布ひきのたき

播磨守為家

これかとを雲ちらあて乃ふ孫雲

とゝ宣なりぬ乃ひさ乃うち紀

家繼

いくひろとさゝ海はゆ　きこ　ゆ　ゆ　ゆ

ゝ　ゝ　ゝ　

ゝをめはいと聲くをゝ乃殿内せ給ひてゝきの方
右大臣十よ日より院おこらを法て日ゝ夜かき
とゝ内ゝよりおこなはゝせ給ひもそゝくゝ法ひ
ゝこゝ御ゝ内めの次こゝ九十一日に陽明門院より行幸
あり保三條よりゝゝせ法ゝおくいとゝうめてたきよ
も院の内参ゝとゝ内ゝ参ゝゝうゝゝめさゝ
もいゝゝくゝゝゝゝせ給ひしなゝゝゝゝきよゝく
給ひめすゝくゝ加階あゝくゝゝゝ右大臣内ゝせ
内ゝよりおこなはゝせ法ゝくいるゝゝゝうゝせさゝ給ひ
ゝもおゝゝゝゝ記ゝゝゝ法あゝ内ゝめを本日の祖なゝ
ゝもいゝゝたゝゝゝゝゝゝゝゝゝきゝゝのゝうゝゝもゝゝ

らを法てたゝゝゝゝゝ二月十七日ゝゝ右大臣の
宣旨ゝゝゝぬいゝゝめゝゝた資法あゝゝ法ゝなん
村上ゝ九ゝゝの法弦中納言ゝ内ゝ宮の御
むすめ乃御ゝゝいゝん内ゝ形くあそに風ゝこと
ゝ記ゝゝあゝゝさゝゝあゝ中ゝ摂政乃御ゝゝ女御霍景
殿ゝ母ゝと中ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

まてはうまし給ふ御ふ毎に寧相中将又法性寺
座主僧都まくなしいとめくさ紀なりひかり
かくくさねるよう物ものせ物ふ大将とのゝうへ今
ちきこしめしおもひまとはせ給ふ大将とのゝうへ今
御ぶんかとゝ聞るゝ貴ゆくさかりあれうへをうくは
ゝとはらんかなりてもぬはんよあるさまをいと
ちうおもひめきあくはそのあるゝせ給ふをと
いとあはれなりうへの法ふちかとりのたりけん
中ねとゝたてはるまおりくれとはは七十よよ
なゝせ給ふてはてまつりかゝるゝせ給ふれう
ふう音ときはんちなもんうのりれよいみ

ゝれとよひ曉ゝ念仏は御修法あるゝ
あるゝ抱せ給ふ給へて和ときれすくゝせ給ふ
はは三ゝそくゝ僧ゝを南ゝくあるゝもりのゝとれて
わゝゝせ給ふかといはんうあれゝ心はそくのと
やうなる事もありゝ母かゝ乳ゝちせ給を給
ふゝゝはくゝはゝれなりひゝ御ゝゝゝたち
みな佐すて三人おりゝ南ゝ要女御院乃女御
なゝゝておりゝまゝよ中将もおゝゝ南
ゝをむとゝゝ南ゝを行ゝかゝゝあゝ南ゝとおは
ゝゝなけの殿竹はわさまゝと宮たち四十ゝあゝ
せなまゝてゝゝかうせさせ御乃ゝゝゝ

ところかうくだり給ふ大臣の御方にて
七十よまでけり給ひおとし給ひてあまたの君
達はらからやうくなくなくたちなら世給ひぬめく御
后宮御とし給しめくるをれすいとしくもたりけり世
給御に用白殿のうへ大納言殿二人御むまこ
御て中宮は一宮ひめ宮おとうとたちまうち世給
つるをみたてまつり世給いとめくたち大将とは
のうへなしを内母君世給へるをいと
後一条院御とうとこの中宮うみ世給
後朱雀院御とう陽明門院の一品宮とぞ申しまい
らをなりをかを給てしうそ御二條殿用白殿御河

右大臣御とうえ君世給つるを世給つくもたは
世小後朱雀院ようそ小君世給つるをと后の
はかりいうれも世給をひまかの君世御御
てそうたくはら世給はかりをいとめくたく中宮
をかりそうて海つう世給殿乃うへは子御し
なら世給てかくをたうそ中ら世給つへ御君て
はおはえ世乃つひなくも世のたなりはをしの
るくおうう中すいをめくたり大殿とのの三位
中将宰相とう世給て大将殿をさ世給の宰相は
大将と宮はすはいとめて多くいまめうとは
うそは中納云中納すてなう御殿の四月下

ようの乃事をゝ中ゝ申つゝ紀事ゝを敬あく
せゝ給ふ大ゝ殿のうへもわゝうせたまへりいと
うつくゝき御ひかりあゝとゝう大将殿十六よ
ゝ殿ゝせ給ふといとゝおかしきやうのうつくゝ
きやうつきめてゝくゝなりゝまゝ行幸をこそは
聞まゝ年ゝしゝうゝきあまの日ゝ世ゝ給ふゝあに
ゝ一年資總ゝ中ゝ　左ゝ

とゝ給ふゝ紀伊国の国賀茂神にゝゝいのゝよ
ゝ申ゝゝ人ゝ世ゝゝ上ゝ年ゝ参ゝ人第ゝ行ゝ殿
いとゝゝゝ

いとて皇太后宮はなくなりぬ世はいとゞしくうそ寒ハ
ゝさえはてゝ世はひわびはみこさちおはゝく
りのせうをはゝくと女房みてゝ乃見こそたゝゆす
にうゑをいとゝめて雪はきなりぬいとゝ世はるゝ
もあの二三年けるゝ皇ハ月ハ紀をせあてまいらせ
竹人と申ーこせ奉ひそれそのゝ年ハ九月ゝ
三日にいとゝ世竹ぬ十二月ゝ六條ゝ内わたらせ
給ていとゝ世竹ぬ六条ゝ殿をゝ世をそれハゝや
いとゝ殿ゝと中宮ゝ宮ゝらせ給ていとゝ世
殿ぬ内ゝ世殿ゝ殿たゝ殿ゝすゝら殿給ゝをれ
ハ東宮ゝ宮ゝらゝ殿ゝ乃つ孫なゝもおゝり

ゝり四月ゝ皇ゝ皇ゝ皇ゝ殿ゝとゝ出
ゝゝ世の人殿ゝ殿ゝと殿ゝゆゝふ六ゝ月ゝ日ゝゝりてゝ
いとゝゝやゝゝゝ

用白のうへ大将殿なとゝられたまへりとすし
うらすうひかゝしていそきさせたまへるいのり数
ちゝす或ひは宮うせたまへるせをいのりあはせ
ますせハ殿ハ殿たちはせたまはぬハ月ゝ加太大夫はかり
かゝり河中納言右京大夫道家兵部卿これさゝ差
人赤宮なくはかりぬ中納言兵部卿ハうへもなく
はかりかなしぬあさまーさうふそ但馬守高房兵部卿
章なとしなく成ぬ民部卿のかたゝのかたのかたゝのかゝの
むすめ兵部卿亮乃小方のかたゝなくなりぬ
かりもしくして四乃一宮はをうさのかりをはえ
おくたゝ殿給なく八月六日つゐふう殿さ殿ぬ

たれもしくなりたけの殿給事ゝさうなし四
はをうれはをふゝ世をなくなけかせ給大納言殿
なきいのかう給ふのうちかりうん東宮大夫殿
女御殿番殿と宮えさすく九月十ゝ日女宮むすめ
させ給ぬくちたくくあり殿うれといせうる
業殿あわさまにそあり殿なくはめうせ給けう中
宮ハ四ゝ第ゝせ給へとはをはせ給てゝ殿
ゝ殿をくありますをあさまー殿事もひと
ゝうまゝきあるはせ給せうんとやや
せあて宮えさせ給へをいゝせ給ぬうちあゝまう
うちくゝ世てまうゝせ給くはりまさ四ーをの

とおりゝ めいてられてうゝ くたりゝ めさ
はゝ物なとゝいせうくたりゝ せゝわゝもさゝ面ゝ く思出
申ゝ申ゝ せゝ竹ゝ ゝ ゝかさゝ わゝ ゝ ゝ

なしすおはきよはたらしきせすとくといそれたくら
せ竹ゝく十月ゆ余日はゝ世はゝ陽ゆ中宮もわらし
殊給るくゆらせ給をゆらしてゆと学らしたまこの
らるれ大事よいかくうゆ陽せてたもせたて
申ゆ世竹らるわらしせ活いしめくゆ今りり
かき遊よ紅葉きらくゆ多くきかうひりりをゆの
きゆりるをそひうらんしみえて面うう毋ゆひれ
申ゆ堂ゆけうかう地くあきっゆらうあ
かくゆりうそられゆるよあをやうみしわるさ
きゆゆ堂の月光りかと極楽ふたかふ面なけせ
猫猫の地ゆこうるのいさこれとをしらぬらうわ

なりゆ池のうるすきわらりゆ殿なくうふゆるる
変たなりりをれとおはつうりりけうるさまあや
あゆをうりうらこ面いねゆ乃まひおうる程をいる
うみゆ三百人ゆ僧のうるをゆうきてり
道ーをそうかとをらるつく千人ゆ僧をれ
りる見はしゆらくく花をおるてさうをき学ゆを
はりうみゆ行幸なとゆをゆもめくたり
別当りんうやうるりめく寺を供僧なりう
なしなりあるりかといとめたいるう新ゆけ
てそうらせ竹けりいるくるるくゆめりよう
せ給りん御幸をるらくおけすます位るくを

ひとうもかうせ給てぬをりよさ記の世よりわ
おかめ、めきるは形にそとそえゆせ給へれ
供僧みやしまきき僧綱なりて供養法おこ
かひつとめけわ天くえ法くらをこまりと弱さ
うりふとこしうとかくをやうをもきぬ
めわ又幕源時条かときいのやうにくすきぬ弓
うやのはるうつ紀せを学えしかをうせ給けう
年かうをくはいうこきりち升のおわをこといい
見せき給なまりをいみきゆんれうかりよの
うくなとをきる月自れをくゆよつけてをうくひ
明くいうるはうちあうさまのようけう

りうの三うなをのは思ひ宮ゆを之者ひ
まうを竹つをはあうる海なとりみうれ
給めゆ申うせ給二月一日宮治まそ加へ道敬
れ御まうか八講なとせう法行よ四源文をとの
うくをわうせ給て四五日あうそ明人らせ竹ぬ
中文尼御うのやちくならせ竹へをやうく
はいのうなと御うせうを給三月晦日四月
寄合せ御を法れれ左右いとこえりうねをか
海なとまいの事也かるとをもいをめくあく
れうり・ま寺伐うこそ集かとくにめしそ
えうせ弱をきけうこ式うしかりいまよわの

[illegible]ける京今の序思いてらきけ
[illegible]の行幸事合かとして
[illegible]十よ日[illegible]みやの御
[illegible]にな四月[illegible]
[illegible]世給へ[illegible]
[illegible]はこかき給人
[illegible]十八日いとやを
[illegible]世給へ[illegible]
[illegible]なきく殿のうへと
[illegible]給ひとも[illegible]
[illegible]給へ[illegible]
[illegible]三日夜のうへ[illegible]

[illegible]世給て八幡へ[illegible]世給め房をこそ
[illegible]を[illegible]御車のうしろおりひ
[illegible]こ海の[illegible]女なれ心
[illegible]事[illegible]
[illegible]世中[illegible]乃[illegible]又節大将
[illegible]世給世の[illegible]やも女院に条宮
[illegible]
[illegible]世給へ[illegible]
[illegible]世給へ[illegible]
[illegible]世中ゆを
[illegible]乃
[illegible]世給へ[illegible]女房

国立国会図書館　タイトル『栄花物語 40巻』　請求記号 WA7-148
ガラス使用

さうへ紀人くれむすあ乃加ゝ行くをみかめ
ゝそ申せ給いるゝうゝ行ゝそさまくれさりり行
ゆ世とも行やくくをけゝさいれ先をそれ寄ゝせ
たわ加りのみ祖ひ紀なとしてみしゝさてそあわ
りゝ申奥乃ゝ世すしお開白とりくれむすあと
て安伊とりよりのせさ給竹資仲れ中納云乃和方
さふらひ給ま一条院の信宗中納とさゝゝゝ申
むもめれ沛大納云れゝ乃橋津守師家わ賀文の中
納云れ申ま乃出雲守なとゝやうの系たちれむや
わゝをみかめゝいて祐大夫あとのていふつ紀ま
もあゝすひゝ母そまゝゝ申ゝ行ゝそ寄れるあり

（小カ）

あゝ申ゝ宣又毎ゝなゝもなゝ世行くゝれあそい
おゝゝ変ゝおゝゝ申せゝおゝゝめするあく
めてゝゝ毎れもくゝめてくゝうまくおゝ
め次大将毎申れかゝちあゝさ毎ゝ見ゝやのゝ
あゝゝやうつきめくゝ行きれゝりさ申世わゝそゝ
のいてゝうゝゝれいくゝ行ゝ面ゝれい殿る
ひゝ人ゝゝ世給ゝ毎ゝゝなくゝ条りりさりのる
うつき思中所世給人毎ゝさまゝゝりりあわゝも
ゝゝゝ毎ゝゝりゝすりらせ竹ゝる安伊ゝれを安申
乃あゝりりまん毎ま申ゝゝ宣ゝめゝうゝきそゝゝめ
乃そゝゝゝすひあみやの三世けゝりゝるゝ世

給をつぎしくれ行なくゆあ母ろくきつゝせ竹
てゆゝゝゝゆせ行中文ゝこれなひ女文すて
おりゝます四条宮よつぎ小おくゝきすゝて
ゝゝゝならせ行ゝ大将殿のゆゝゝをまゆゝ
おゝゝ殿ゝゝよゝせゝくゆゝらを行ゝゆ民
こゆをゆゝ行おゝゝゆゝゝゝゝひ
あやゝゝくゆをゝくゝゝのをゝゆゝきせ竹民部の甚
ゝゝゆくなやゝゝくゝ行ゝゝゆゝゝゆゝ雑
ゝゝゝゝ竹ゝんゝんゝゝゝゆせ行ゝをゝゆ
ゝゝゆゝゝ竹をゝゝゝゝゝゝゝゝゝ給ゝを
ゝのゝゝ行ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

の給けゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
給ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ

さきはらん左大臣とのゝ内ハ世のゝ中をなゝ
めしむをもの乃はらくにたちうゝまつりとゝ人ハ
国えきゝ大賢乃猛乃事ゝ明と殿乃人ゝ多ゝ有ゝ
御せんなとゝ殺れ人そ多ゝ有ゝ内大臣乃母君を
嵯三条ゝそおもゝ申せゝ世ゝ乃ゝとめゝく毎ゝ内れ市ん
れおゝかゝ乃はをさそい奉ゝ申せとゝし
れかゝる世ゝ乃ゝ有ゝるをなゝとゝのゝ中ゝく過ゝくい
みとゝ殺ゝめさゝ乃ゝなゝるゝ大ゝ内大臣左大ゝの
ゝ世ゝ乃事ゝ月日にそゝ人ゝく海されゝ右大殿
ゝ世ゝとゝいゝ内ゝ乃ゝ乱ゝ竹ゝ世ゝ乃ゝ
らひゝ世ゝ竹ゝ内大ゝ臣ゝ乃ゝ世ゝ乃ゝ
ゝ世ゝ乃ゝ事ゝ

ゝ世ゝ世ゝ月日乃ゝ経ゝ方ゝ
ゝ有ゝ右大ゝ殿ゝ乃ゝ事ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ大ゝ納ゝ言ゝ乃ゝ
ゝ世ゝ乃ゝ
ゝ世ゝ
ゝ世ゝ
ゝ世

らん殿も十八ばかりにてなまめかしきかたちにて世ばなれたる大饗
かしいなめてたけ立ちのたち大臣の方人をたてまつ
ものしたまへるを世ばなれたる御ぞたちなどいとめ
でたくかをりあひたるにいとはなやかにうつくしう
小一條のおとゝ貞信公たれ子たれ子なれど九
條殿をばいとけ給ひるを世に用ゐ給ふ御ぞ
へうばうくうそいとめでたくおぼしたるをと
を世人ほめ二条殿いとにおはしまして
のさまにおぼしたるに御ぞ
さまらうにみ乃自然殿おはしまして世ばなれたる
乃めでたう宮ばらくこそ小乃陣ゐ大殿ばらう
車ゐ世さうぞくして宮ばらの世給て殿ばら
そひたりしまに殿人ゐ達ゐさるつ賀ゐ紀里
ばら供ゐ作然殿ばらにひろきゐばら乃人ゐお
ゐそねなどうり二条ばら車ゐ里さしおくばら殿す
ばゐひとゝり兄弟ゐもうゐ人めくやうぬゐ殿
ばゐ殿常ゐもいとめでたくみえさせ給ふ殿
ばゐ殿ばらゐ世ばらゐ変ゐそ行来ばるうゐひゐり
そひいてさせ給ふばらゐ有さ殿と祭の日人さ里
をんばゐ殿車乃ばゐ殿ばゐ乃ばゐ殿めでたく世の人めて
ゐさねなくゐんゐりとそ申ばるハさう

むらさきの御

あるべき事なれいそがれ
志ふかくめく世給ふるものを天王寺よ
ゆきて世給りんはてとばかりわらうをの法
うしきもの事乃見おくりてすくせ給應
德元年九月十二日ゆうてさ殿法四条宮もゆ
なり世給あれうへ殿車みそまうてゆ世
給め屋乃車とゆくゆ方にみ門家れた方ふる
さまくれ花をうちいろくれかうて日
とうゆ人ゆ世給すしの殿ねうわるをりき
毎日もあるあるのみうをやうに御藏はうてみうき

なれすてうきを見るにはるるを
たるどもの内へし日ごろ侍従来りあるえない
つもりてたり上達部殿上人ばかりもなくまゐせ
給へり饗菜などもすべてもの内なるべし侍のそひ
などはるべし紀とは中宮きさきなりけるとも
いふ事ありてそれやのなりるもどまわぬ方
なと殿れはかるべきやのは方ものとさ海くはか
らくはかりう高はこちらおもくはそしゆ
とて十七日ありそきうへ〜せ物ねいやおをく
はりしきりの日をつくおりくなるせ給へく九月
廿二日う殿はを給ねはるる海しなとせのつ

はりはりるるもはりなけかせ給ふはきよりひ
殿るるはりは大殿うへ殿うへなるとうたるひ
殿るへ内内はせんはるることはりとなるう
はかるなくうひはくはるしめはいるせたま
へりみうきとはみ紀はりきうは殿はわるしめ
なけうせ給まえ方まかと思なけふ給るうるう
なくうるはりはよりてさ殿物ぬ殿文なりはりはせ給
ぬ内殿はるはのゆくはうへ〜せふ海はるはゆ
かとはめるすうるはりうせ物くるれはりれ
るはいくるせうまるすめ房はをはりまく
さうへ紀う殿里そまるはりはるるれふは文里内意

さてまつ世話を見てくまつ殿給をあれも也
いとゝ世話ともあるへ見よりもきせ申後
竹なくて万世話をたくいとゝくやうみ節御
らんさやうぬ四月なとをあうしまとをおはえを
月日もかゝるをゆけとつゆのはゆなとを御らん
いきさせ給りそうるのたとうあうおうし
後しうりれすささせ給月こゝよ丈六北法
御をつくらを給ひ御堂をつくうせ給よのつ孫か
らすとうひゆ世話さきれ世のは堀きうと
たうらう世万人をいみうゝ御うう中きう
をよひなくうけを見うし月かれと

雲かくれ給ハうゝうゝ
みのとし北九月廿房のゝとみ右大弁通俊
ゝくれつくらみ神を御うし
御うきうるゝ秋ハきうう
かくてもいつてうゝへさせ給くきとみてく
まうきとかさうゝるゝやその年もかさと
いふ事たあうてあををうう業人かと御うう
ゝ要文をくゝうゝ世竹て應徳二年十一
月八日にう御世竹ぬあきくいうちく
はきゝぬ事ありうゝ廿万一品言かとかを
う世話ゝ後とうなりひゝ風うつ業うかう

みやつかきけうつきたそくかと時うしなひうる
山ゐはまそいつきとそうちにをもくまみいる
さくあかりめうちうちはくかめ一さ年也
月日ハうしれとたれも笑ひくに日ハなを
それうるうそうそきうかうしかしあをいそ
さ世給ことをはくあくきよんあくあかりいつ
世はつりいつ笑ひめすみのゑ源氏あたさよ
多羽といふ所ハ池山ひろうはたらく世竹ハあり
はも世はへきはんきうきをやなと申一四人義経よ
十一月廿六日ハ二宮には位譲申さ世給ふ
そ八よりつ世はかこの事ハ又義源時祭

さまかうるくつてはも世はなくのあるをまそ
すはきくくうそ兎小はりめれはを給ふ
けういをのれはり賀茂にをあきの日ふよ行
幸のはりつるもやきり歌会をきさりはも世
はもはりつるもかくあはりめられハよそと
あれハころあくあくせのつ〇はりねはんの狩
ゆりかれ者くひをあくとみなられを見
きも世はよを太大とそあくいうはれハあり
うくとこてきうつ世給ふんといくをよりさ
ゆくはんのうちりんう立はの右大臣うへ
う殺はも世はかきはうのうへ左右大臣はあくか

かゝせ給ぬめでたき事申さらひ物うしさまた
に物ゝせ給ひをたく人まそおもくゝ申つきとを
はいのちを八十よくたちたち開白敷うへ対面
子めて四大敷をは強まそうしてきつらを給ひと
めく寄紀侍をはきまかわ十二月十六日御即位ゆ
は興まをつゝゆひく寄てきの門きうめくなきわを
なきまくきをこ寄れゆしてこ寄てきつらせ物
ハきうをめゝ裏なり御めのとあちかいの
をけかりのをいをめてたりとの様改婚をせ給
ことをわりまりきとさ御ゆうてをみいと先
てたゝ院乃はゆるをさきかくそをはんにゆのせ

さう場竹て示くはゆゝはゆ相宿なとやすうる
めくるきはさ後や新文まかは四大敷の女御はは
をゝ乃ゑめ宮居はせ物ぬおりりかかんこ
を女御敷ハ学ゝなけうせ給茶寄文のりゝせ給
つれハ後はをかゝゆをはゆる男ひゝつきはせ
はゆるゝ物給て院ふりをおりゝ中守をかか
つきくをきりゝせはゆゝりりこみや乃御
をゝ学ゝめゝ見すきゝせ給ふをなくては
寄れはゆをはをわくゝ物給くをきにひゝを
のを学ゝいてはせ物くはのをあをはりゝ申ゝ
いをうひなくはりきなはせはゆ千月廿一

日なり女房代まもとりく服忌たく世話母ハ右
大ゝの内子ハ義法寺基貞と宮ゝ寺の清むもめ女
院よりさふらひ給ひつゝ宮ゝ御ものくかくり見
そ毎く人のゝ宮ゝかれと一の人ハ清むもめそ寺給
ゝ宮ゝ中てゝこれハかりとてゝ御衣来ハ多く
りえゝのあり物ゝひそあれゝ御ぬいまゝあり
てゝ故中宮を宣旨給ひ多ひゝ御ものを
給しゝたくさくのさまゝとあり給めを
なりて御ぬゝれをゝ御なりてのゝ御清人
ゝくゝ清ゝ宮ゝ清ゝ御乃ゝ人ひあ宮達院前
前宮なとゝ清ゝ御ゝ御ゝ御

人々なりときこえさせたまふ院の御ぶんのうちは
きいふことなくめんぞくしめさるる院れん人
とのゝ人なとかぶしめくくて二月廿二日高野
に詣でさせ給ふ女房人々乃ゝ乃ゝ
ゆきさせ給ふ内大臣殿おとゝは
ゝゝさせ給たる大あにいきうてさせ給きりちく
なりてゆきさせ給をこゝなるてゝあかせ給ハ
ゆりはまけしくやまはこえさせ給いとしく
あらまほしきゆきを雪かと思りていとあさまし
くわかせ九日ゝゝさせ給源時条ほ内大臣乃ゝ君
ゝのかおりてさて面つらせ給ふるゝ九月

ゆ一日には元服をさせ給ふ御使に形ちをを給
ふるゝ少ほうあるゝ内ゝゝ紀春日乃源時条乃
舞人せさせ給日とのゝ大そんゐほ頼親の条ゝ
せりゝ
内紀そもゝゝさゝの花乃ちりをつく
こゝゝゝ人ゝけをこゝそさて
殿をいたゝきるゝをつくさせ給ふ八幡行
幸ゝゝりうさにおそかるゝ内ゝ香羽院ほ
ゝゝゝゆきさせ給十廿丁城こゝあてつくさせ給十了
ゝゝを池ゝてはるくとしをゝ酒のゝゝさゐ
ては私ゝゝへゝゝゝゝいとめそたゝ加ゝゝ

ゆを待てをいつきは北宮殿とを見たてまつり給
るもなく中〳〵小見もなんまつけてもの様
されめてゝとてあの二三年もうるはしくいみ
祝れのうさまもをみてくまりらせ給ふ
つゝは出興れはとまり斎宮とを見たてまつり給
をも出興の後行幸をひしくあわれとして殿
にはゝまりすひめうや見もまゝ世話をわりの日く
とひとくあそひとゆつれはなりしことをはつて
て法皇せうを給て殿せ行ぬまゝ名残
しくはりめさゆんん〳〵斎宮れは方
小のゝ御りまはおりくれ春秋乃花をうの

さうをすておりしさ宮はかくはあそひなりんを
殿りておりまはをくゝりの世はをうち
をくはをふさゆまめてうれ紀ゆ様はりたく宮花
はをりまさぬはをてゆりれにはりきるあり
四月ふ成て祭り院斎宮をゆ法をして世中
のくんすう中小を斎宮のわゝをくちひさ紀
おかきをうゝいるくうはくきを如房我も
我をといをてをいをを志はうをの胸をむ
きうれうをふりきはりはりのはりをのをう
殿を家いひはくすくをはゆ行殿めをさまく
にはゝうをりをりはりれ院れ出車ゝとりれ

けうとき人やうにあくれとかりまゝに紀ゆき
と無文とをしたる御車てしたりてすゝ乗文とも
ちらみのせうそくまらせ竹てをうまるまてすゝ
いとかうけなくあいれはかり御直衣に袖のほの
うすくさせ竹つくいうしうあしく袴ふかてを
かりめ唐衣の色ありやまゝ紀とをに唐衣いと花
やうのみいまのあやしう見あめしいなまといしまわり
うそ衣とりめまりて左右大臣殿大納言
ちそれらわしをそうのきうくはうまり
まりあをはかりそそまりていと大臣ちをそれ
は馬あくけいしひ給世人いみ紫ゆかなんを

けうあゆまりあるしかりあ寿院なとのあうし
北佐そうのそうとなとまてたりてまてとうめく
たりれとあくいなりりさかりあうを用てすあく
はらんをまう院のかりゆまうをそむうさきのく
紫りひいそ紀るりるまのひくきみちてみゆう
とそのうれかりやとみしなりけきくかくん
のとうにしなくておをはらせ給てあうしゆす
見とひうをゆりまはりまつ里つをあをめて
はなきまにそありけうとめく申りあ秋深れ御
車とうめうあうせ竹くいりりくはせ給りをあんの
うりうう陪給とはらんをうを人めてやりをを有つき

猶て何となくてもきぬ鳥羽よりまうでつゝ世
給てはあそびあわ法ゐとやゝ物語てもくさゝせ給
二條院故院の御基おはしまさせ給ふ喜撰院
とゝく東山かゝる所に三昧堂さてらんれうさいゝ
よ御堂者てゐ世給ては八講五十講なとをゐ世給
故院故みやのおはしまし南〳〵河のほとりまてかくせさ
せ給へとて侍殿もおろひ給ふらんかし中〳〵いと
ゝうとく後一條院故中宮後冷泉院此御事かし
中〳〵いとゝうやし〳〵彼源氏乃かくやくひ乃文
のあまかゝる法形又ようあけらんこゝろ〳〵く
やむあせなくめてゝ御堂あるこ院此御所あ此

ゝ条なりかにはゐ世給りとゝ御なをもてゝ
て御腸足にとゝかゝるとてゝ寺いとゝ御乃
なりは女らて世御殿の人乃腹や者る中納言殿乃
いとゝしてうゝとゝあるん雲井〳〵まく
御うをかられ一月のひかりを
うゝ
を外すてすをいん世代をもゝ
あゝをとすれ爲月乃けゝ乃郷
御系わゝ世給ゝ見なる殿給ふ行さなく行
ゝ〳〵ほとゝて毎〳〵のみをあ初えてまゝ世
給てゝ年比ありて御うゝさかゝ見なゝを給

いとうあれてすがりめさせ給ひ
ゆゝしうなりやせ給ふとやゆゝしかるべき山里すま
いとゝ哀にあさましくよる日のみのみとれいり給へる
重のあるてはかなき日ふるしく法師山をとゝ住ひ
けをいとうあるまゝに見のあるまゝにうちはらくをそ
めう山のりをこゝにはゝ院せられはゝにはれと思ふ
いとゝ哀也年かゝる重て見やこにかゝりうる事に
りきをはうるまゝに用ゆるしきりとに民部卿
まうり給ふ加院北殿上人まそをうち給ひしう
うゝ哀ふてあるゝまうり給うるるかといひて
みの自女房のひやりる

いとゝ見はかれにけり雲をあはれとや
ゝすをわけく去るゝひらん
此ゝ

民部卿

はるかるもみそゝひしれゝを外ゝ和
ゝまれうゝひをゝ色をうる星して
はるれなる事のをゝをおかく星太后宮もを
にりをかります四條宮も宮法師ゝ法雲ゝ
ゝひをませ法故中宮のひめ宮一面をはみやにた
りますゝきをゝせ法はきたるゝなゝすかく
て猫隠女御ゝをゝをゝうゝせ竹ぬまゝ寺院はりさ
せ竹ぬいとうゝむまめゝるかりるはるゝ人

なり一院は姫宮おはせ
ぬいと花やかのみめをた貴れ給ひ
給なしは對面かさかるへ
四条宮のひめ君やをまたせ竹ひ給
抱ものやうとりひとくかさ
唐衣なしめくたくおのう花乃多くを
て十人ばかりぬれとかとも
君人ならふせんきうかとこ
ひめ宮乃御方ハ四人りそ
竹かうちあわさきんとう
はうとをとうのんやも院いうきをとう

なうす足きまく世給ひくて六月つうりかふよね
ぬをを竹ぬ人氏家ハおりすゆきのとハ御
あて大臣職ふまたく殆竹市殿ハ有さ
めくたりおいもをかとえらを竹くを
女房ハりきりてさらを竹ぬくくなり
なけきと昔をいまとそくる見をあいり
なくてくさは女房ハ仏ち君ハ形ちん
宗を思人なとはうん人ハきていりまおとう
けをなとあゆを竹く衆て物のくるなしまく
ていくらんいと表ハの四大臣ハ少ね反今ハ三位
中ねそうおく花やの形ハはあり頼ゆれ左大

殿の御はしたなさを形ばかりせ給へ給ふうちの文ゆゑ
と見しめ給ふにつけても殿のかたさせ給ふにつけ
せ給をとしかのわすれ給なくゆゆしく物云よりはせ給く
中将は中納言にまてなるの春日祭の上卿せ給を給
侍ともゆゑ世ゆゑ乃殿上人さるもせ
ゆゑ義人みなとをかうまつられりし聚楽行の
ちうゆゑ思ひしく心はせたらてゆゑ
宮治殿ゆゑ参宮ありしまゝ侍はゆゑ宮ちゆゑ
ゆゑ殿小侍さいしまめりくてめ房のうね
のうゆゑ給ふ殿ゆゑ殿にまゆゑとめを
あやゆゑ思ひけぬうちわゝのはさゝ殿のまく

わゝうんをんかつひに内侍なとよういなく
ていをうゝうゝ書くつゝまゝをゝうゝ内殿
まゝゆく思ひうこつ河なとわたゝせ給殿えをい
ゆゑ殿をゝうゝ殿をかゝてゆか殿ゆ
つゝせ給て祭のさゝ記ありさまよのつゝゆゑす
めくたくて条ゝせ給つをまゝうゝ人大殿乃ゝくてお
りまゝゝうゝ法殿ゆゑうゝくゝ殿ゆゑをえゝ
しさゝいゝ法せ殿を春日社神ゆゑ殿
給てやめてゝくゝ見をゝを給はけんとゝ乃うちに四
めまゝりゝるを同ゝ心ゆゑ内乃をゝめて思ひ
ゝゆゑ乃日ゝゝせ給法殿ゝゝゝゝゝゝゝ

WA 7
148
20

ゆうそくうちうれとをそ思やりあるく世よ
みを加さの山のうるさくひ明くめてたう思ひ
て車ひきとゝめ侍るとすゝろくの
ゆくすゑをいとゝ所のへそゆうつき
うもの乃山乃松乃こゑをいとゝ
かとゝうめうしに人ゝ松をひある

国立国会図書館　タイトル『栄花物語 40巻』 請求記号 WA7-148
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『栄花物語 40巻』 請求記号 WA7-148

ガラス使用